

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

執筆に関連するもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 理恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001442

執筆に関連するもの

森 理恵

執筆に関連するモノは、文房具類、取材関連品、出版関連品に大別することができる。以下、それぞれについて概容を述べる。

① 文房具

a 鉛筆

著作の中でたびたび記しているように、大村しげは執筆に、3B の鉛筆を用いた。コレクションの中の 3B 鉛筆は次のとおりである。

まず、削ってあり、使用途中と考えられるものとして、1 階オモテノマのレターケースの中に、ほかのさまざまな日用品やボールペン、サインペンなどと一緒に 3B 鉛筆が 1 本、入っていた。他には、三菱 3B 鉛筆が 1 本、2 階の机の引き出しに入っていた。中敷に 1971 (昭和 46) 年の朝日新聞が使われた引き出しである。同じく 2 階からは、削った鉛筆を多数収納した金属製の箱（洋菓子の空き缶）が 3 箱発見された。そのうち 1 箱は、使用中の 3B または 2B の楕円形三菱鉛筆が 22 本、コーリン鉛筆 1 本（どちらも朝日新聞社の社名入り）、赤鉛筆 1 本が入ったものであり、もう 1 箱は、同じ朝日新聞社の社名入り楕円形三菱鉛筆 113 本が入ったもの、そして最後の 1 箱は 3B 鉛筆 62 本が入ったものである。

また未使用のものでは、1 階オモテノマで、三菱 3B 鉛筆 1 ダース入り 2 箱が、小引き出しの 3 段目から発見された。2 階には、朝日新聞社の社名入り 3B 鉛筆 1 ダース入りが 2 箱あり、そのうち 1 箱は削った状態で箱に収納されていた。同じく 2 階には、箱に「支局用」とマジック書きされた 3B 鉛筆 1 ダースもあった。

ところで大村しげは鉛筆を、非常に短くなるまで削って使い、最後に独楽状にまでなった鉛筆を、「ちび丸えんぴつ」と呼び、愛着を持って紙箱などにしまい、捨てることがなかった（大村 1993: 15-18 ほか）。その「ちび丸えんぴつ」は、1 階オモテノマから 1 箱、2 階から 2 箱、発見されている。1 階のものは黒 49 本と赤 1 本で、消しゴムや鉛筆削りとともにおさめられていた。2 階の 2 箱はどちらもキャビネットの 5 段目にあったもので、1 つはマッチ箱に黒 25 本と赤 1 本がおさめられ、もう 1 つは紙箱に黒 77 本と赤 2 本がおさめられていた。

3B 以外では 2 階に、未使用の消しゴムとともに筆箱に入った朝日新聞社の社名入り 2B 鉛筆 1 ダース、トンボ HB 鉛筆 6 本入り 1 箱、三菱 HB 鉛筆 1 ダース入り 3 箱、同 B 鉛筆 1 箱、専用プラスチック容器に入った三菱 Hi-uniHB 11 本、コーリン赤鉛筆 1 ダース入り 1 箱などがある。これらはすべて未使用である。1 階オモテノマにも未

使用の赤鉛筆が6本、小引き出しの中にあった。

なお、1階オクノマには、濃さ不明の鉛筆が1本、引き出しに入れられていたが、これは執筆ではなくメモなどに使われたものと思われる。

以上のことから大村は、朝日新聞との縁で主に三菱の3B鉛筆を愛用し、なくなってから補充するのではなく大量に常備していたこと、そして、著書に記されているとおり、「ちび丸えんぴつ」になるまで使い、箱などに入れて保管していたことがわかる。執筆場所であった1階オモテノマから発見されたものは、比較的晩年に使用されていたものであろう。2階に保管されていたものは、あるとき整理したものと考えられる。

b 鉛筆削り

鉛筆削りは、2階の小引き出しの中のプラスチックケースに、消しゴムと糸きり挟みとともにおさめられていたものと、上記の「ちび丸えんぴつ」と一緒におさめられていたもの、そして戦前のものかと思われる、古い金属性のものがあった。著書に「ドイツ製の小さいえんぴつ削りで、ぎりぎり削れるのが、木のところが一センチぐらいまで」（大村1993：17）とあるのは、「ちび丸えんぴつ」と一緒におさめられていたものであろうか。そのほか、鉛筆削りには小刀類を用いたのではないかとおもわれるが、相当するものを特定できなかった。

c 消しゴム

1階オモテノマの小引き出しのなかに使用中の消しゴムが3個、未使用の消しゴムが1個、おなじくオモテノマのレターケース2段目の中に使用中の消しゴムが1個あった。さらに、上記の「ちび丸えんぴつ」とともに、きわめて小さくなった消しゴムが1個、おさめられていた。また、2階から発見された4つの筆箱の中に未使用のものが2つあった。鉛筆にくらべて消しゴムの遺存量は少なく、とくに、未使用の常備品と考えられるものはほとんどない。執筆に際し、消しゴムはあまり使用しなかったのではないかと思われる。

d 原稿用紙

大村しげの執筆活動において、3Bの鉛筆で文字が記されたのは原稿用紙である。

まず、2階には、使用中のものは「テー・エス原稿箋」100字詰めが1冊、朝日新聞大阪本社編集局の75字詰めが1冊、講談社の200字詰めが1冊あった。未使用のものは、講談社200字詰めが10冊、朝日新聞社200字詰めが1冊、これは大村しげ宛朝日新聞社の封筒に入っていた。そのほか未使用のものでは、京都市の封筒入りで「ゲッセイ上質原稿用紙」192字詰め1冊、200字詰め1冊、満寿屋のデラックス原稿用紙400字詰めで罫線が緑色とオレンジ色のものが各1冊、伊東屋特選原稿用紙400

字詰め1冊、そのほか9冊があった。

一方、1階オモテノマには、「ライフ」の200字詰めが3冊、新潮社の200字詰めが17冊、中央公論社の200字詰めが5冊、以下綴じていないバラの状態で、「ライフ」の200字詰めが55枚、新潮社の400字詰めが4枚、佼成出版社の400字詰め400枚、ミサワホームの400字詰め44枚、日本放送出版の400字詰め9枚、京都市の400字詰め9枚、医歯薬出版の400字詰め111枚、満寿屋の400字詰め63枚、主婦の友社の160字詰め20枚、「ファンシークリエーション」の200字詰め20枚、「機関誌平安」の200字詰め19枚、中央公論社の200字詰め62枚、京都民報社の200字詰め128枚、佼成出版社の200字詰め200枚、「マミール」の250字詰め77枚、「ひととき」の250字詰め100枚、などがあった。比較的晩年に使われたものの残りが、1階から発見されたものであると思われる。

原稿用紙についてはとくに決まりはなく、原稿依頼のあった出版社のものを中心として、それ以外にも適宜、購入したものを用いたようである。原稿依頼のたびに出版社から原稿用紙が送られてくるためであろう、未使用のままの原稿用紙はきわめて多数に上る。

なお、文筆家らしく、住所録やメモに原稿用紙を用いたものも多数、発見されている。

e その他文房具

上記以外の文房具としては、筆記具ではボールペン^り、万年筆、シャープペンシルなどがあるが、いずれも数は多くなく、執筆活動に用いられたということはなさそうである。そのほかには、ホッチキス3、下敷き2、インク壺2、未使用のノート十数冊などがあった。また、「大村方」の住所と「婦人朝日ペンシル會」の名称が刻印されたスタンプと、同じく「大村方」の住所と「ひととき京都グループ」の名称が刻印されたスタンプが2階にあった。同人誌時代の大村を知る上で貴重である。

② 取材関連品

執筆のための取材関連品としては、各種観光・寺社パンフレット、飲食店・菓子店などのパンフレット、食堂・旅館の箸袋、写真、名刺、メモ・ノート類が挙げられる。単なる思い出の品なのか、取材のためのものなのかを区別できないものもあるが、いずれもきわめて大量に遺存しており、煩瑣になるためここでは詳述しない。ただし、2階からは、17冊の、各種連載記事の取材ノートが発見されている。いずれもA5版の大学ノートであり、中に、取材先のパンフレットやチラシ、箸袋、名刺、領収書等がはさまれていた。1970年代～80年代のものである。

③ 出版関連品

出版関連品と出版記念関連品とに分けて述べる。

a 出版関連品

原稿や校正原稿、わりつけ表、出版契約書、出版社の封筒、編集者の名刺、編集者とやりとりした通信文（手紙・ファクシミリ）、愛読者カードなどである。

とくに1階オモテノマにあった、黄色のじょうぶなビニール袋には、件数で88件にも及ぶ、1980年代～90年代の出版関連品がおさめられており貴重である。自筆原稿や原稿掲載記事の切り抜きのほか、仕事ごとに関連品をまとめて、出版社の封筒に入れたものもある。封筒には、大村しげの字で、書名などがマジック書きされている。なかには、大村の絶筆「秋山さんと別れて」や、大村の訃報記事・追悼文もあり、これらがまとめて黄色のビニール袋に収納されたのは、大村の没後と考えられる。

このなかで、「ハートランドバリ島淡交社」とマジック書きされた淡交社のB5版茶封筒には、1997（平成9）年に出版された『ハートランドバリ島村ぐらし』（淡交社）の関連品として次のようなものがおさめられていた。出版契約書、愛読者カード118通分のコピー、淡交社の編集担当者からの愛読者カードコピーの送り状、納品書8通、請求書2通、郵便局払込取扱票1、領収証1、源泉徴収票1である。著書の献本先と思われる、「送り先」として6件の住所を記したメモのコピーも入っていた。また、別の著書の関連品として、1985（昭和60）年に出版された『京台所の詩』（淡交社）の出版契約書と、『京に暮らせば（仮）』と『ほっこり京ぐらし』（淡交社）の企画書も一緒に入っていた。多数の愛読者カードのコピーは、大村しげの著書がどのように受容されていたのかを知る上で、たいへん貴重な資料である。

同様に、「佼成出版社」とマジック書きされた佼成出版社のA4版封筒には、『京・暮らしの彩り』（佼成出版社）、『京の禅寺と精進料理』（佼成出版社）、『しまつとぜいたくの間』（佼成出版社）、『車椅子の目線で』（佼成出版社）の計4通の出版契約書（1988～96・昭和63～平成8年）、契約書用袋1、出版予告2、愛読者カードのコピー7、書評切抜き1、書評コピー5、エッセイ賞の規程のコピー、印税計算メモ1、納品書・受領書1などがおさめられていた。

また、「バリ島原稿」と表裏にマジック書きされた朝日新聞社の封筒には、「バリ島の病院で」と題する大村しげの原稿がおさめられている。コピーが4部あり、推敲用かと思われる。内容は、バリ島で最初に、脳梗塞でたおれたときの記述である。

そのほか、「沢正」とマジック書きされた淡交社のB5版茶封筒には、料理店「京都東山澤正」の1996（平成8）年1月から12月までの献立と、そのコピーをホッチキスでとじたものが入っている。これは、各月の献立に大村しげが「京の野菜歳時記」という短文を寄稿したものである。このような仕事についても整理して保管されていた。

なお、2階のキャビネット3段目には、主婦と生活社『とっておきの京都』と現代企画室『おぼんざい（仮題）』の出版契約書が、それぞれ封筒に入って保管されていた。また、73通の『おぼんざい』愛読者カード（1977・昭和52年）が『西陣グラフ』の封筒におさめられているもののほか、各種原稿、ゲラ刷りなども、いろいろな書類や書簡類にまじって段ボール箱から発見されている。

b 出版記念関連品

大村しげの著書の出版記念祝賀会は何度か開催されている。国立民族学博物館収藏品から判明するものでは、秋山十三子・平山千鶴と共著の『京のおぼんざい』（1966 中外書房）、『京の女ごよみ』（1974 白川書院）・『だれも書かなかった京都』（1973 主婦と生活社）・『京のおぼんざい再版』記念、大村単著の『京の手づくり』（1974 講談社）、『京の禅寺と精進料理』（1988 佼成出版社）、『京都火と水と』（1984 冬樹社）、『美味しいもんばなし』（1987 鎌倉書房）、そして大村しげの「生前葬」ともいえる『京都・バリ島車椅子往来』（1999 中央公論社）である。また、1988（昭和63）年4月24日の「秋山十三子著『私の酒造り唄』出版を祝うつどい」では発起人として、1988（昭和63）年5月29日の「京都『なかむら』中村文治さんの京の料理出版を祝う会」では世話人代表としてパーティをとりしきっている。

2階からは、これら祝賀会の案内状、出席者名簿、出欠返事葉書、祝電、記念写真、スナップ写真、などが多数発見された。ただし、最後の出版記念祝賀会となった『京都バリ島車椅子往来』関連品は、1階オモテノマにあった。地下には、1984（昭和59）年5月13日のホテルフジタでの『京都火と水と』の出版記念祝賀会の寄せ書きがあった。

一例として、上記「秋山十三子著『私の酒造り唄』出版を祝うつどい」関連では、案内状3、専用封筒2、進行表2、会場の月桂冠大倉記念館の地図6、会場写真1、スナップ写真1、予算書コピー1、打ち合わせメモ1、住所のメモなどが一括して保管されていた。

なお、出版記念パーティの記念品として、2階に「おぼんざい出版記念 秋山十三子 大村しげ 平山千鶴」と包み紙に記された草木染のテーブルセンター、地下に「金瓢 「私の酒造り唄」出版記念 秋山十三子」の焼き印が入った一合枧などがあった。これらのモノから、大村しげの、執筆に関するさまざまな側面を知ることができる。

注

- 1) 最晩年の大村は、筆圧がなくなって3B鉛筆では書けなくなったため、ボールペンを執筆に用いた（大村1999:77）。しかし、国立民族学博物館収藏品の中に、最晩年に用いられたものがあるかどうかは確認できなかった。

文 献

大村しげ

1993 『しまつとぜいたくの間 ゆたかな暮らしのエコロジー』 東京：佼成出版社。

1997 『京都・バリ島車椅子往来』 東京：中央公論社。